

浅川扇状地遺跡群

徳間本堂原遺跡

—土木事業代替地先行取得事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1995・3

長野市教育委員会

序

社会生活の変化と共に「物の豊さ」から「心の豊さ」が求められる今日、文化財は現代人の心の糧として欠くことのできぬ、貴重な国民的財産であると考えます。

特に埋蔵文化財は、直接大地に刻み込まれた歴史であり、当時の物質文化のみならず信仰・宗教等の精神史など、文化の始源をも内包する基準資料であり、埋蔵文化財そのものが歴史・文化を考えるうえでの実証者といえましょう。

このたび土木事業代替地先行取得事業にともない、浅川扇状地遺跡群徳間本堂原遺跡の発掘調査を実施いたしました。

事業予定地周辺は過去の調査で重要な埋蔵文化財が発見されており、古代史研究上注目されていた地域であり、今回の調査でも多大な成果が得られました。

本書はその成果を要約し、長野市の埋蔵文化財第69集として報告するものです。この報告書が地域古代史の解明や文化財保護の一助として、学術的に関係各方面に広くご活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書刊行にいたるまで公私にわたり多大なご援助・ご指導を賜りました関係諸機関ならびに各位に心からお礼申し上げます。

平成7年3月

長野市教育委員会 教育長 滝澤忠男

例　　言

- 1 本書は土木事業代替地先行取得事業に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は長野県土地開発公社の委託を受けて、長野市教育委員会が実施した。
- 3 調査地は長野市大字徳間字本堂原1,067-2他に位置する。
本遺跡はすでに「徳間本堂原遺跡」として登録されており（『長野県史』考古資料編・遺跡地名表）、今回の報告にあたっても、浅川扇状地遺跡群徳間本堂原遺跡として報告する。
- 4 調査によって得られた諸資料は長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター）で保管している。
- 5 本書は調査によって確認・検出された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点をおいた。資料掲載の要領は下記のとおりである。
 - ・資料は検出されたものの中から時期・性格等ある程度明確に把握しうるものを中心掲載した。ただし特殊なもののはこの限りではない。
 - ・遺構番号は調査時に用いた仮番号を、報告にあたって再整理しており、またすべての遺構を掲載しているわけではないので、必ずしも通し番号になってはいない点ご理解願いたい。
 - ・遺構の測量は（有）写真測図研究所に委託し、コーディックシステムにより1:20の縮尺で基本原図を作成し、本書では基本的に1:80の縮尺に統一してある。ただし、遺物出土状況等微細を要するものに関してはこの限りでない。
 - ・遺物実測図は基本的に土器1:4、土器拓影1:3、石器1:3に統一してあるが、その他のものに関しては適宜縮尺を明示してある。
 - ・土器実測図のうち赤彩・黒色処理等はスクリーンで、また須恵器は断面を黒塗りで表現してある。
 - ・出土土器観察表の記述は次の要領を行なった。
番号：図版番号と一致する。
法量：実際の計測値ならびに推定復元による計測値を記した。
遺存度：図示した部分の遺存度を記した。

目 次

序	
例言	
第1章 調査経過	1
1 調査に至る経過	1
2 調査体制	2
第2章 調査地周辺の考古学的環境	4
第3章 調査概要	6
第4章 遺構と遺物	8
1 縄文時代の遺構と遺物	8
2 弥生時代の遺構と遺物	9
3 古墳時代の遺構と遺物	18
4 平安時代の遺構と遺物	23

挿 図 目 次

図1 調査地周辺の地形	図23 第3号礎床墓実測図
図2 調査地周辺遺跡範囲推定図	図24 第4号礎床墓実測図
図3 調査地周辺遺跡分布図	図25 第14号土壙実測図・出土土器実測図
図4 調査区全測図	図26 第1号・2号溝址土層堆積状況実測図
図5 出土縄文土器拓影	図27 第1号溝址8層出土土器拓影
図6 出土石器実測図	図28 第1号住居址実測図
図7 第4号住居址実測図	図29 第1号住居址出土土器実測図
図8 第4号住居址出土土器拓影	図30 第2号住居址実測図
図9 第5号住居址実測図	図31 第2号住居址出土土器実測図
図10 第5号住居址出土土器拓影	図32 第7号住居址実測図・出土土器実測図
図11 第6号住居址出土土器拓影①	図33 第1号古墳周溝出土土器実測図
図12 第6号住居址実測図	図34 第1号古墳周溝土層堆積状況実測図
図13 第6号住居址出土土器実測図	図35 第1号古墳周溝出土土器実測図
図14 第6号住居址出土土器拓影②	図36 第1号土器集中実測図
図15 第8号住居址実測図	図37 第4号墓址実測図
図16 第8号住居址出土土器実測図・出土土器拓影①	図38 第4号墓址出土遺物実測図①
図17 第8号住居址出土土器拓影②	図39 第4号墓址出土遺物実測図②
図18 第3号住居址実測図	図40 第10号住居址実測図
図19 第3号住居址出土土器実測図	図41 第10号住居址出土土器実測図
図20 磚床墓群実測図	図42 第12号土壙実測図
図21 第1号礎床墓実測図	図43 第2号溝址出土土器実測図
図22 第2号礎床墓実測図	図44 遺構外出土土器拓影

第1章 調査経過

1 調査に至る経過

飯綱山を水源とする浅川は、浅川東条地籍の通称浅河原口を扇頂とし主軸を東南東へ向け広大な扇状地を形成している。この扇状地の北辺を限って駒沢川が押田を谷口としてそれ以北の山地を侵食し、その土砂は浅川と複合扇状地を形成して上駒沢付近にまで達している。

調査地は駒沢川の氾濫原と考えられる市立早月高校を望む若槻丘陵南側の緩傾斜地に位置し、周囲にはリンゴ畑や畠が展開する。

平成6年、今回の調査地点に、長野県土木部所管の事業に伴う代替地の造成が計画された。事業予定地は周知の「浅川扇状地遺跡群」の範囲以内に位置するために、長野市教育委員会は長野県長野建設事務所長の委託を受け、平成6年9月5日に試掘調査を実施した。事業予定地内の任意の2地点に試掘坑を設定したが、いずれの地点にても遺物包含層の存在を確認した。

この結果より、造成事業の着手に当たって、事業面積約2,400m²のうち、掘削等の工程により埋蔵文化財に破壊の及ぶ可能性の高い部分約1,000m²について、記録保存を前提とした発掘調査の必要性が確認されるに至った。

本調査は平成7年1月30日より実施し、3月7日に現場におけるすべての調査を終了した。



調査地遠景（中央鉄塔の裏）

2 調査体制

調査主体者

長野市教育委員会 教育長 滝澤忠男

調査機関

長野市埋蔵文化財センター 所長 荒井和雄

主幹 鈴木貞夫

所長補佐 山中武徳

所長補佐 矢口忠良

庶務係 係長 山中武徳

職員 青木厚子

職員 塚田容子

調査係 係長 矢口忠良

主査 青木和明

主事 千野 浩

主事 飯島哲也

主事 風間栄一

主事 小林和子

専門主事 太田重成

専門主事 清水 武

専門員 中殿章子

専門員 笠井敦子

専門員 山田美弥子

専門員 西沢真弓

専門員 寺島孝典

発掘作業参加者

宮沢けさよ・原汪子・佐藤君江・成田孜子・新津三千子・小林志げる・佐藤幸子・佐藤ひで子・小林三郎・横川甚三・中澤秀子・宮島静美・横山ふぢ江・神頭幸雄・美谷島昇・佐藤はま・金子ゆき・宮沢芳美・吉沢トシ子・北村宣之・小林さと・金子紅実子

整理作業参加者

岡沢治子・徳成奈於子・池田見紀・小泉ひろ美・西尾千枝・向山純子・金子紅実子



重機表土剥ぎ



トレンチ掘削



調査風景



調査風景



図1 調査地周辺の地形（1：20,000）

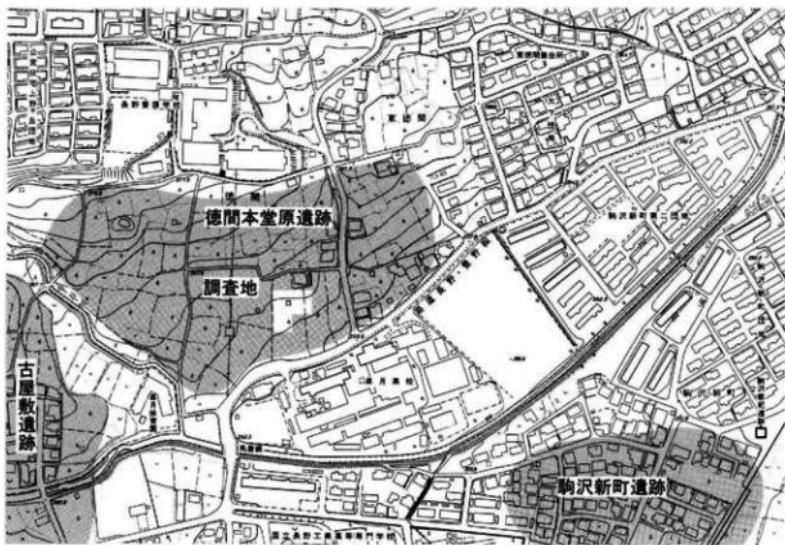


図2 調査地周辺遺跡範囲推定図（1：5,000）

第2章 調査地周辺の考古学的環境

飯綱山を水源とする浅川は山間部を侵食流下した後、浅川東条地籍の通称浅川原口を谷口として盆地に流入し、東南方向を主軸とした平均斜度1／45を計測する典型的な扇状地を形成する。この扇状地上には多くの遺跡が存在し、長野市内でも有数の規模を誇る「浅川扇状地遺跡群」として把握されている。以下浅川扇状地遺跡群の代表的な遺跡について概説し、周辺の考古学的環境としたい。

旧石器時代は、浅川源流に近い猫又池・大池に遺跡が確認されているが扇状地上にはその存在は確認されていない。

縄文時代には湯谷・赤萱平・菊田・牟礼バイパスA地点・徳間柳田・浅川端・松ノ木田の各遺跡が確認されている。これらはともに駒沢川と浅川流域に集中する傾向が認められ、正式調査を受けた遺跡としては前者に牟礼バイパスA地点遺跡、後者に浅川端遺跡・松ノ木田遺跡がある。牟礼バイパスA地点遺跡では前期前葉の住居址1軒、浅川端遺跡では同じく前期前葉の住居址1軒・土壙1基が検出されている。松ノ木田遺跡では前期後葉の集落址がされており、住居址18軒と多数の土壙が検出されている。出土土器の量もおびただしくこれまで不明であった当該期の様相が明かにされてきている。また、けつ状耳飾りを中心とする装飾品類も多量に出土しており前期後葉の中核的集落址として注目される。

弥生時代には徳間柳田遺跡・二ツ宮遺跡・本掘遺跡・牟礼バイパスD地点遺跡・浅川端遺跡・神楽橋遺跡・吉田高校グランド遺跡・本村東沖遺跡等がある。徳間柳田遺跡・本掘遺跡・牟礼バイパスD地点遺跡・浅川端遺跡では主として中期の栗林式期の遺構が、また神楽橋遺跡・吉田高校グランド遺跡・二ツ宮遺跡・本村東沖遺跡では後期の吉田式・箱清水式期の遺構が検出されている。吉田高校グランド遺跡・二ツ宮遺跡・本村東沖遺跡ではそれぞれ時期的に継続する單一集落が検出されており、集落研究に良好な資料を提供している。また本村東沖遺跡では比較的多量の北陸系土器が出土しており当該期の地域間交流の一端を示している。

古墳時代に入り浅川扇状地を特徴づけるのは中期集落の展開であろう。有名な駒沢祭祀遺跡をはじめとして、近年牟礼バイパスB地点遺跡・下宇木遺跡・二ツ宮遺跡・本村東沖遺跡など良好な集落遺跡の検出例が増えてきており、その集中度は善光寺平の中でも特異である。本遺跡に距離的に近い駒沢祭祀遺跡や二ツ宮遺跡などは今回検出された1号古墳の造営集団として把握される可能性もある。また本村東沖遺跡では5世紀中葉から6世紀初頭にかけての住居址56軒を検出している。陶邑編年I型式2段階～4段階に対応すると考えられる古手の須恵器が比較的多量に出土し、多量の石製模造品未製品を出土するなど製作工人に関連する可能性が高い住居址が存在する。また子持ち勾玉・土鉢など特殊な遺物を出土する住居址が存在するなど当該期の中核的集落であった可能性が高い。その立地を合わせ考えるならば、本村東沖遺跡と犀川以北の当該期の盟主的な古墳群である地附山古墳群との関連を想定することは容易であり、この遺跡が地附山古墳群に造営に直接関わった集落として理解することもあるが根拠のないことではなかろう。

古墳時代後期～平安時代にかけては比較的継続して集落が展開する。浅川西条遺跡・牟礼バイパスB・C・D地点遺跡・三輪遺跡・二ツ宮遺跡などが代表的な遺跡といえよう。ただし大規模集落が長期間にわたって同一箇所に存在するのではなく、時期ごとに立地を異にしつつ中核的な集落が形成されている可能性が高い。

三才田子遺跡は数棟の掘立柱建物や円面鏡の出土などから東山道多古駅もしくは何らかの官衙址と推定されている。また稻添遺跡では瓦塔が、二ツ宮遺跡では鷦尾破片が出土しており、初期仏教関連の遺物として注目される。



- | | | | |
|--------------|--------------|--------------|--------------|
| ①徳間本堂原遺跡 | ②駒沢祭祀遺跡 | ③駒沢新町遺跡 | ④古屋敷遺跡 |
| ⑤三才田子遺跡 | ⑥三才前方後円墳 | ⑦駒沢城跡 | ⑧柳田遺跡 |
| ⑨二ツ宮遺跡 | ⑩本振遺跡 | ⑪稻添遺跡 | ⑫吉田高校グランド遺跡 |
| ⑬車札バイパスA地点遺跡 | ⑭車札バイパスB地点遺跡 | ⑮車札バイパスC地点遺跡 | ⑯車札バイパスD地点遺跡 |
| ⑰車札バイパスE地点遺跡 | ⑱浅川西条遺跡 | ⑲徳間古墳群 | ⑳うまやくぼ古墳群 |

図3 調査地周辺遺跡分布図（1：20,000）

第3章 調査概要

今回の調査では弥生時代～平安時代にかけてきわめて多様な遺構・遺物を検出した。以下時代ごとにその概要について述べ調査概要とする。

縄文時代 縄文時代の遺構は検出されていないが、調査区北端にて縄文期の遺物含有層の末端を確認している。

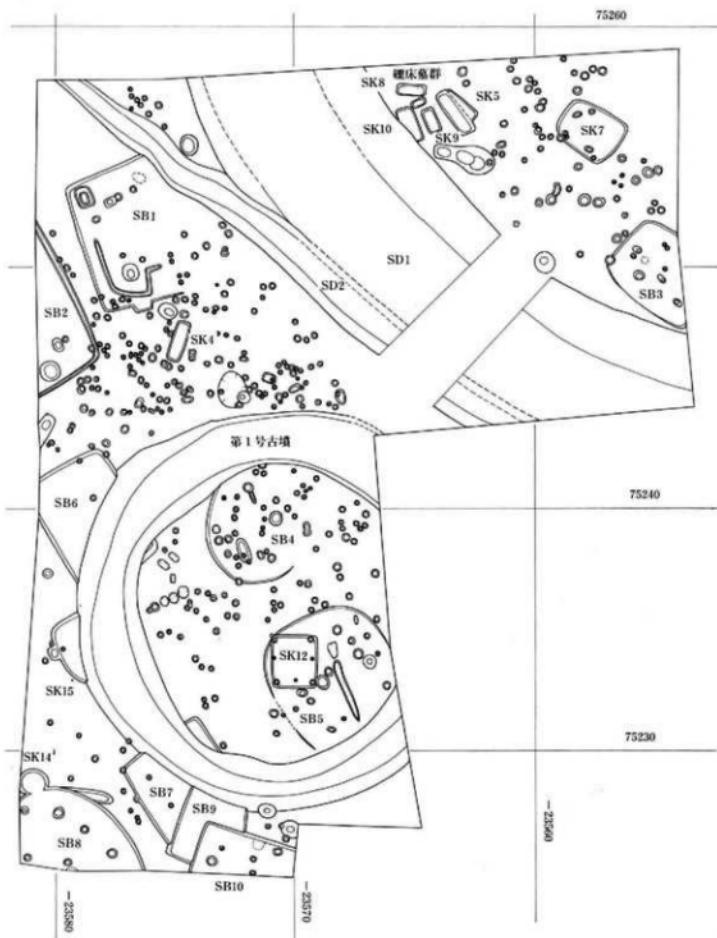


図4 調査区全測図 (1 : 200)

今回の調査地の北側に縄文期の遺跡が展開する可能性が高い。中期初頭～後期初頭の土器破片ならびに石器類を若干検出したのみである。

弥生時代 中期栗林式期の住居址 4軒、礎床墓 4基・溝址 1、後期箱清水式期の住居址 1軒・土壙 1基を検出した。礎床墓群は周溝等の周縁施設は確認されていないものの各主体部が重なり合うことなく、径 3 m ほどの範囲内に密集状態で配置されている。副葬品類の出土は皆無で時期等特定する根拠はないが、1号溝址との切り合い関係や形態等の特徴から弥生中期のものと推定している。14号土壙は土器の出土状況から弥生後期の墓址の可能性が高いものといえる。住居址は他遺構との切り合いや調査区外にかかるものが多く、詳細は不明な部分が多い。

古墳時代 住居址 3軒・古墳 1基・墓址 1基を検出している。住居址はいずれも古墳時代前期に比定される。

古墳は表土直下が遺構確認面となり、墳丘はほぼ完全に削平されており周溝のみを検出した。墳丘径約 12.30m を測る円墳である。周溝内祭祀を反映すると思われる土器群の集中や、赤色顔料を盛った高环などが検出されている。出土土器の様相より古墳時代中期後半に比定され、古式の群集墳の内の 1 基となる可能性が非常に高い。4号墓址からは直刀およびガラス玉といった副葬品が検出されている。駒沢祭祀遺跡やニツ宮遺跡等で検出された同時期集落の墓域として把握しうる可能性も高い。

平安時代 住居址 1軒・溝址 1が検出されているのみである。

若櫻丘陵南斜面における調査は今回がはじめてであり、限られた調査範囲からは詳細不明な部分が多いが、各時代にわたる多様な遺構の検出は、徳間本堂原遺跡の重要性を示すと共に、周辺地域における今後の調査の重要な指針ともなる。



調査区全景

第4章 遺構と遺物

1 繩文時代の遺構と遺物 (図5、6)

今回の調査では縄文時代の遺構は検出されていない。ただし調査区北端にて縄文時代の遺物含有層の末端と考えられる黒色土層が若干確認されており、本調査区より北側に縄文期の跡跡が展開する可能性が高い。

土器、石器がいずれも流れ込みの状態で若干出土している。1～5は縄文時代中期初頭に比定され、1・2は半裁竹管による平行線文を基調に三角印文や細線文を施文し、3は半裁竹管による平行線文と刺突文、4は半裁竹管による平行線文と沈線に沿って連続刺突文を施文している。5は肥厚する口縁部を持ち、右側は把手状のものが剥離しており、その左側に平行線文が認められる。6・7は中期後半に比定され、6は横位と縦位の繩文が、7はわずかに縄文が認められる。8～11は中期末葉の土器で、8は口縁に突起を有し、口縁に沿って沈線が認められる。9～11は加曾利E系統と考えられる。12は後期初頭のもので、縦方向に3本の沈線が認められる。

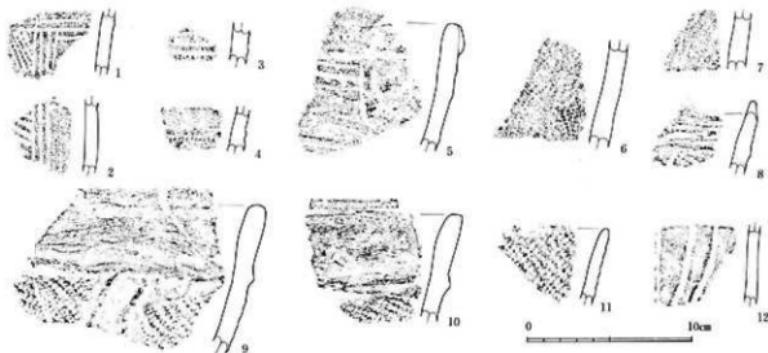


図5 出土縄文土器拓影 (1 : 3)

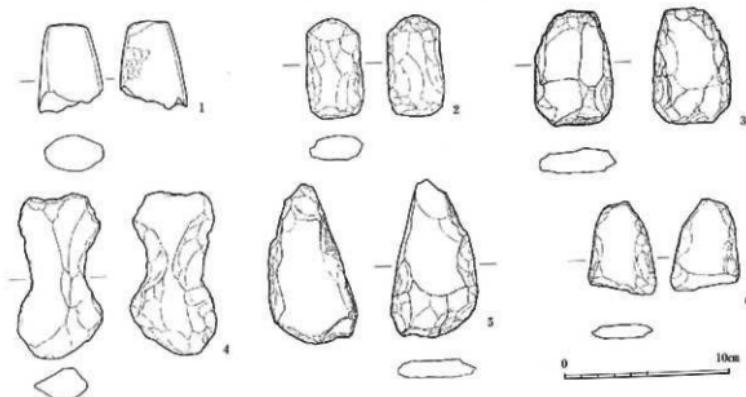


図6 出土石器実測図 (1 : 3)

2 弥生時代の遺構と遺物

第4号住居址(図7、8)

調査区中央付近で検出されたもので、北側は第1号古墳に切られ、また、東側は掘り込みが浅くてプランは不明瞭である。

短軸4.50mほどの梢円形もしくは不整な円形プランで、確認面からの掘り込みは西側で平均20cm前後である。床面は全体に軟弱で不明瞭なものである。柱穴は多数が検出されているが、大部分が平安期の掘り込みと考えられ、柱穴配置は不明である。がながらびにその他の施設は確認されていない。

本遺構を明確に住居址と規定する根拠はない。出土土器の様相から、弥生時代中期・栗林式期と考えられる。

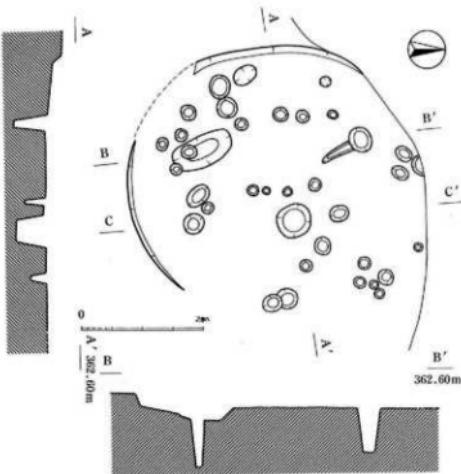


図7 第4号住居址実測図(1:80)



図8 第4号住居址出土土器拓影(1:3)

第5号住居址(図9、10)

第1号古墳周溝と12号土壙に切られ、一部が調査区外となる。検出面からの掘り込みは最大で20cm前後と浅く、南側はことに不明瞭である。平面プランは短軸5.05mほどの隅張りの隅丸長方形と考えられる。柱穴は掘り込み規模からP₁～P₅と考えられ、6本の長方形配置と予想される。炉址は検出されていないが、住居址中央部分に南北に伸びる溝状の落ち込みには、炭化物・焼土粒が比較的多量に含まれていた。床面は住居址中央付近を中心比較的縮まっていたが全体的に軟弱である。出土土器より弥生時代中期・栗林式期の所産と考えられる。

第6号住居址(図11～14)

南側を第1号古墳周溝に切られ、北西隅は調査区外となる。平面プランは5.30×3.80mの隅丸長方形を呈し、

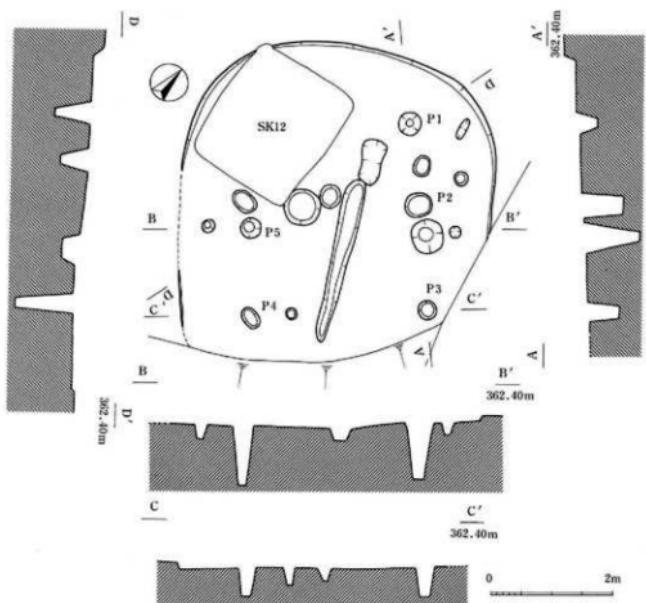


図9 第5号住居址実測図(1:80)

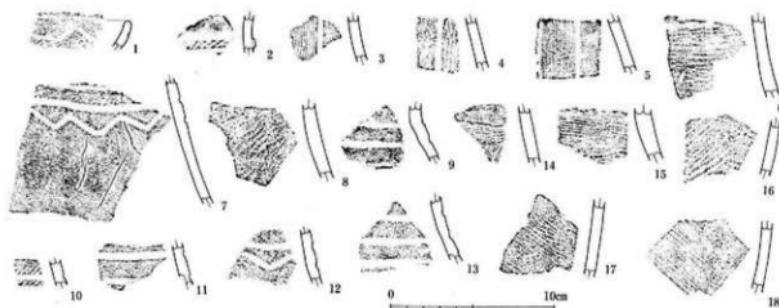


図10 第5号住居址出土土器拓影(1:3)

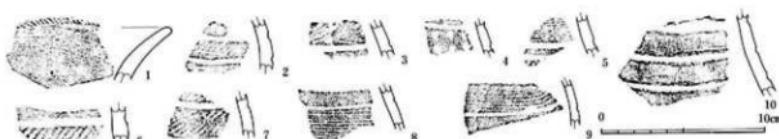


図11 第6号住居址出土土器拓影①(1:3)

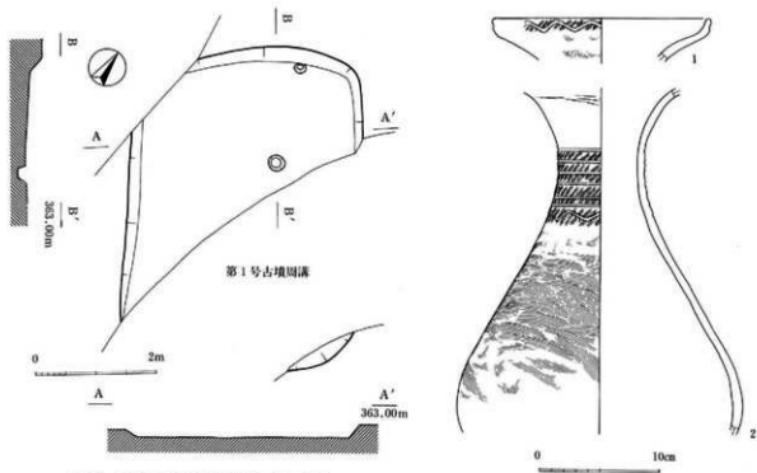


图12 第6号住居址实测图 (1 : 80)

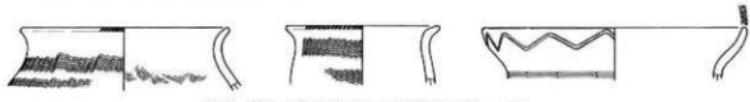


图13 第6号住居址出土土器实测图 (1 : 4)

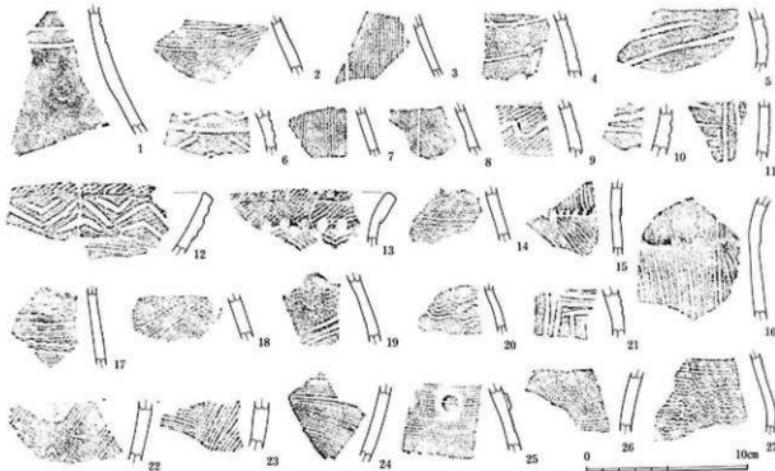


图14 第6号住居址出土土器拓影② (1 : 3)

検出面からの掘り込みは平均25cm前後である。2本の柱穴が検出されているが、本遺構に伴うものか不明である。床面は全体に軟弱で不明瞭なものである。炉址等その他の施設は確認されておらず、本遺構を住居址とする積極的な根拠はない。覆土内より壺・甕を中心に比較的多量の土器が出土している。一部後期の土器も混入するが、弥生時代中期・栗林式期の所産と考えられる。

第8号住居址(図15~17)

調査区南西端にて検出された住居址で、北側は14号土壤に切られ、南側は1/2ほどが調査区外となる。

平面プランは長軸6.30mほどの長楕円形もしくは胴張りの隅丸長方形と予想される。確認面からの掘り込みは深く、平均50cmを測る。柱穴はP₁～P₅が検出されている。主柱穴はP₁・P₃・P₄の4本長方形配置と予想され短軸2.30m、長軸2.70mを測る。P₆棟持柱、P₅はがに伴う施設の可能性も考えられる。炉は住居址中央やや南西よりの地点に検出され、地床がである。底面はかなり固く焼き締まっていた。床面は主柱穴に囲まれた住居址中央部分を中心に固く締まっていたが、壁際は軟弱なものとなる。

出土土器の様相から、弥生時代中期・栗林式器の所産と考えられる。

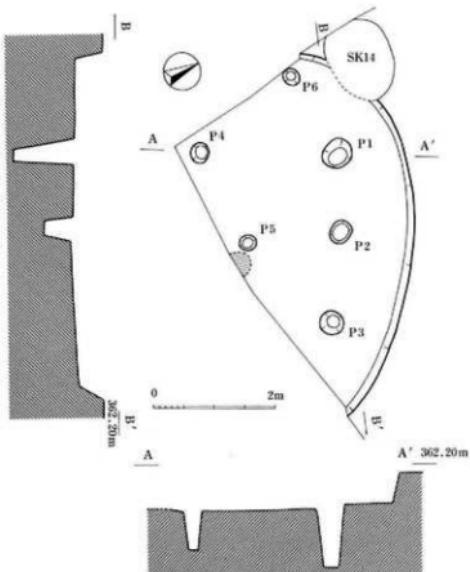


図15 第8号住居址実測図(1:80)

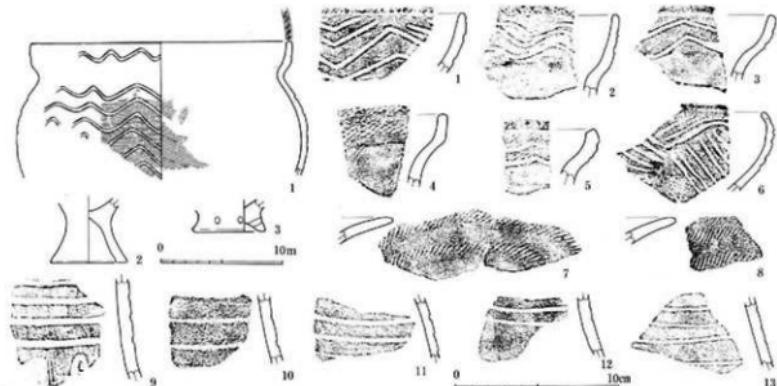


図16 第8号住居址出土土器実測図・出土土器拓影①

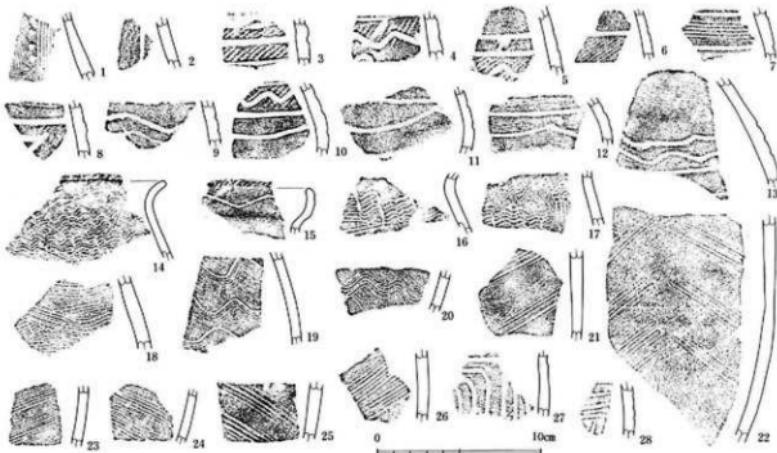


図17 第8号住居址出土土器拓影② (1 : 3)

第3号住居址 (図18、19)

調査区北東にて検出された住居址で、東側は1/3ほどが調査区外となるが、他造構との切りあいはない。平面プランは4,10×3,20mほどの隅丸長方形を呈する。地形の傾斜のため南側の掘り込みは不明瞭であるが、北側は平均20cmほどの深さである。本住居址に伴う柱穴としてP₁～P₄が検出された。主柱穴はP₁～P₃で短軸1,70m・長軸2,00mの4本の長方形配置と予想される。P₄は棟持柱であろう。炉は奥壁側主柱穴間中央やや壁よりのところに検出され、径25cmほどの地床炉である。床面は住居址中央付近を中心に固く縮まっていたが壁際は不明瞭なものとなる。床面より壺が出土している。出土土器の様相から弥生時代後期箱清水式期に位置付けられる。

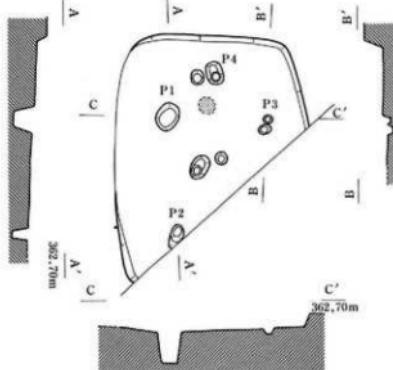


図18 第3号住居址実測図 (1 : 80)

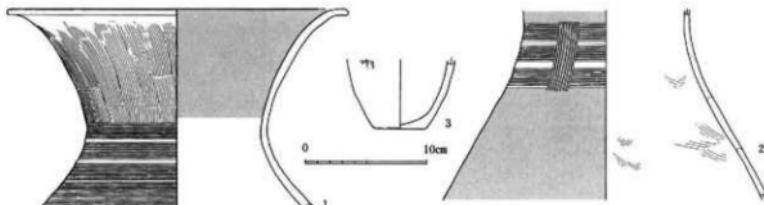


図19 第3号住居址出土土器実測図 (1 : 4)

礫床墓 (図20)

調査区北端より、4基の礫床墓が検出されている。周囲に周溝等の開発施設は確認されていないが、各主体部が重なり合うことなく、径3mほどの範囲内に密集状態で配置されている。

主体部の形態は、埋葬部に礫床を伴い、埋葬部を挟んで両側小口に土と石を集積する1号墓と、埋葬部に礫床を設け、埋葬部の端部に集積を伴わない2~4号墓に2分される。被葬者の性格を推定する資料として、人骨や副葬品類は全く検出されておらず、埋葬施設の形態と被葬者の性格との関連は不明と言わざるを得ない。これら主体部の覆土はすべて水洗浄を行なったが、玉類等の副葬品は皆無であった。また、いずれのも主体部からも、弥生中期栗林式土器や土師器の小破片が若干出土したのみで、時期を特定する根拠となる出土土器はない。

ただし、2号墓は後述する1号溝址に南西端を切られている可能性が高く、1号溝址の最下層の遺物包含層が栗林式期のものであり、また長野市松原遺跡などで検出された礫床墓群のあり方より類推するならば、本遺跡の礫床墓群も弥生時代中期・栗林式期のものである可能性は、きわめて高いものと言えよう。

第1号礫床墓 (SK5) (図21)

地形の傾斜に沿って主軸を取っており、埋葬頭位は北側と考えられる。また東側は上部を平安期の土壤に掘り

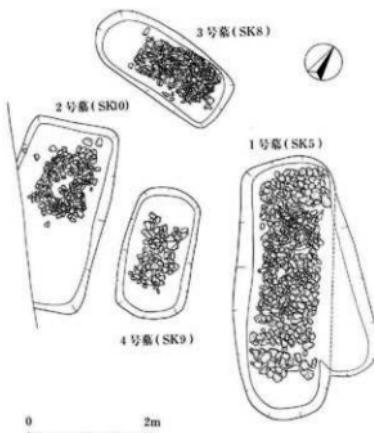


図20 細床墓群実測図 (1 : 40)

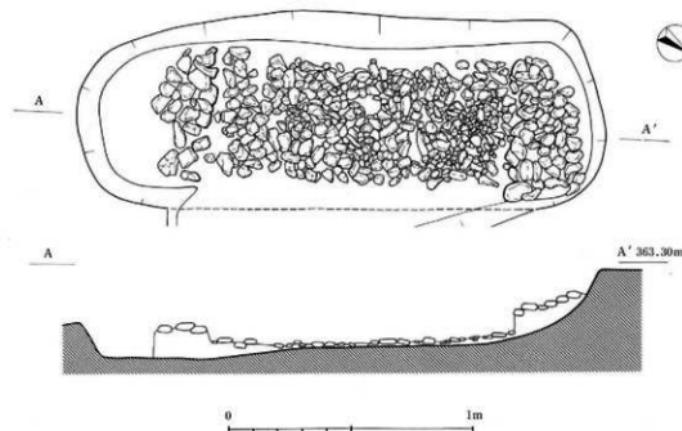


図21 第1号礫床墓実測図 (1 : 20)

込まれている。埋葬部に礫床を設け、両側の小口に土を盛りその上に礫を集積している。埋葬部の規模は 1.35×0.48 mで、小口の礫の集積は南側で長さ25cm、北側で30cm前後で、幅は埋葬部よりも若干長めに行なわれている。墓壌掘り方は 2.15×0.80 mを測る。最終的に断ち割り調査を行なっているが、小口板もしくは側板の痕跡は確認されていない。ただし小口南側の集石下盛り土内にV字状の落ち込みが認められたが明確な小口痕と言えるものではない。

第2号礫床墓 (SK10) (図22)

1号墓同様地形の傾斜に沿って主軸を取る。墓壌掘り方西南縁を1号溝址に切られる。埋葬部に礫床を設けるが、小口部には集石を伴わないもので、礫床は 0.63×0.43 m、墓壌掘り方は 1.56×0.90 mを測る。礫床は墓壌北半に集中し、南側は空間となる。木棺等の痕跡は確認されていない。

第3号礫床墓 (SK8) (図23)

1・2号墓とは主軸を違える礫床墓で、埋葬部に礫床を設けるが、小口部には集石を伴わない。礫床は 0.69×0.36 m、墓壌掘り方は 1.23×0.55 mを測る。礫床は墓壌東側に集中し、2号墓ほどではないにしろ西側に空間を形成する。木棺等の痕跡は確認されていない。

第4号礫床墓 (SK9) (図24)

1・2号墓同様地形の傾斜に沿って主軸を取っており、埋葬部に礫床を設けるが、小口部には集石を伴ないものである。礫床は 0.60×0.35 m、墓壌掘り方は 1.09×0.59 mを測る。

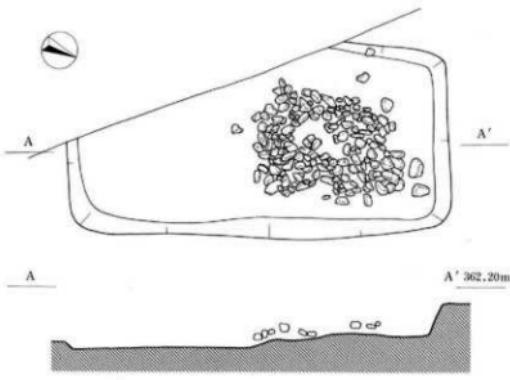


図22 第2号礫床墓実測図 (1 : 20)

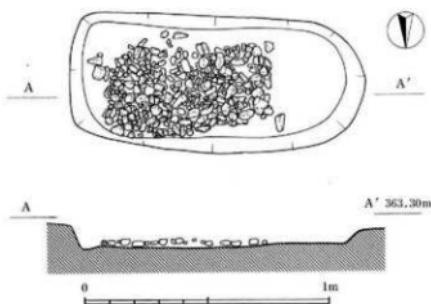


図23 第3号礫床墓実測図 (1 : 20)

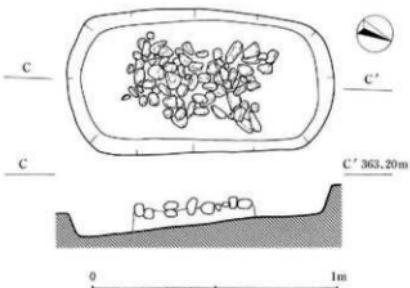


図24 第4号礫床墓実測図 (1 : 20)

礎床は墓壙底よりかなり浮いた状態で構築されており、1～3号墓とは異質である。木棺等の痕跡は確認されていない。

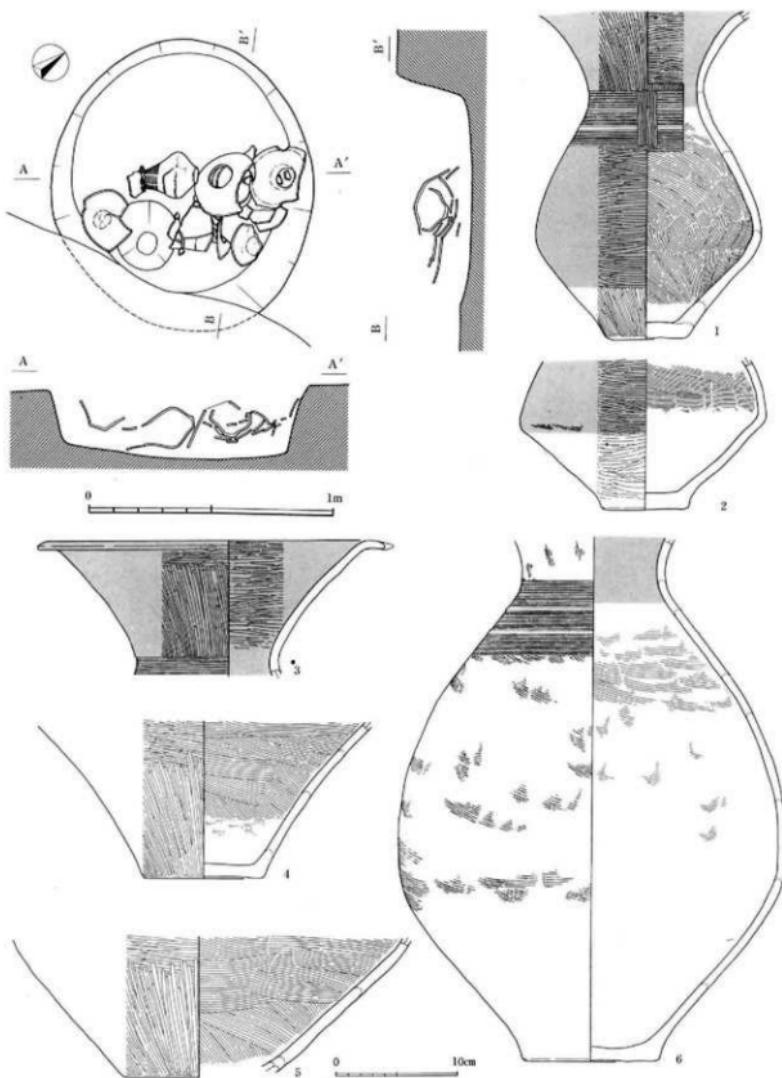


図25 14号土壙実測図（1：20）ならびに同土壙出土土器実測図（1：4）

14号土壙（図25）

調査区南西端にて検出された土壙で、8号住居址を切って構築されている。平面プランは $1.20 \times 1.07\text{m}$ のやや不整な円形を呈し、確認面からの掘り込みは平均30cm前後である。土壙底は平坦であるが、南西側には径30cmほどの円形の浅い掘り込みが検出されている。弥生時代後期・箱清水式期の壺が6個出土している。いずれも土壙底より浮いた状況で出土しているが、東壁際に壺6（図25）を破砕して敷いた上に、壺2を正位の状態で置き、その上に蓋状に壺底部5を逆位でかぶせている。壺1は土壙中央部に横倒しの状態で出土したが、当初は5の周辺に正位で置かれていたものであろう。壺2の東側には壺3が斜めの状態で、また西壁際には壺4が斜めの状態で出土している。土器の集中している北側は遺物の出土が見られず、大きな空間となっている。本道構の性格は即断しかねるが、土器の出土状況は意図的に供えられたものようであり、墓址である可能性も高い。ただし、人骨・玉類等その他特殊な副葬品的なものは出土していない。

1号溝址（図26、27）

調査区北半にて検出されたもので、北西から南東方向へほぼ地形の傾斜に沿って直線的に伸びるもので、約24m

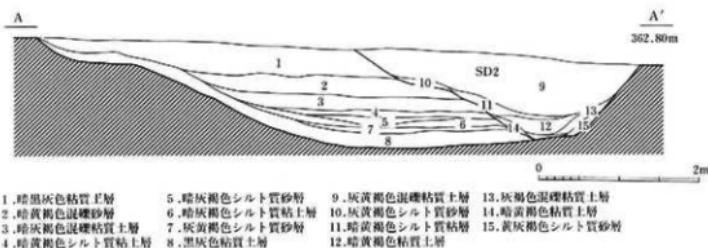


図26 1号・2号溝址土層堆積状況実測図（1:60）

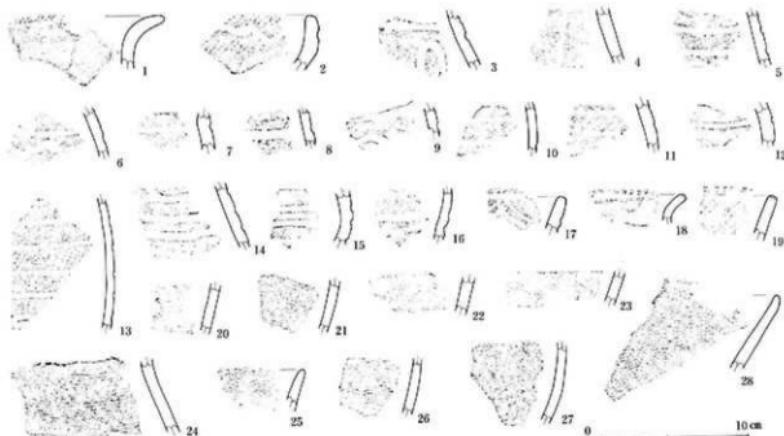


図27 1号溝址第8層出土土器拓影（1:3）

にわたって検出されている。確認面での幅は平均7.50m、溝底面での幅は平均3.40mを測り、掘り込みは緩やかである。西側上面を平安時代の2号溝址に切られる。時間的制約から調査は一部に留めたため、詳細は不明な点が多い。主な遺物は第1層と第8層から出土している。第1層の出土遺物の主体は平安期のもので、2号溝址掘削以前の平安期の包含層ととらえられる。第8層からは、一部弥生時代後期の箱清水式が混入するものの、主体は中期・栗林式期の土器であり、この時期に比定できよう。4~6層はシルト質粘土層と砂層の互層になっており、栗林式期の包含層の堆積後は流路として機能していたものと考えられる。またこの溝の形成も、自然流路を掘削したものである可能性が高い。

3 古墳時代の遺構と遺物

第1号住居址（図28、29）

調査区北西にて検出された住居址で、北側を平安期の2号溝址に切られ、また東側は削平されている。

平面プランは長軸5.90mの隅丸方形住居址と予想される。確認面からの掘り込みは北側で平均30cm前後、南側で平均15cm前後と浅くなる。床面は全体に軟弱で不明瞭なものである。

主柱穴はP₁・P₂の2本が検出されている。東側の主柱穴は検出されなかったが、4本方形の配置が予想される。

住居址北西隅から検出されたP₃は貯蔵穴と推定される。90×70cmの方形の2段にわたる掘り込みを有し、深さ65cmを測る。

炉は奥壁側柱穴間中央壁寄りに位置し、径40cmほどの不整な円形を呈する地床炉である。

住居址南西隅には幅20cm・深さ5cm前後の壁周溝が、また南側にはそれと接続する形の間仕切り溝が検出されている。小型丸底土器、高环、甑が出土しているがいずれも床面よりかなり浮いた状態で出土している。出土土器の様相から古墳時代前期の所産ととらえられる。

第2号住居址（図30、31）

調査区北西にて検出された住居址で、大半が調査区外となり詳細は不明である。

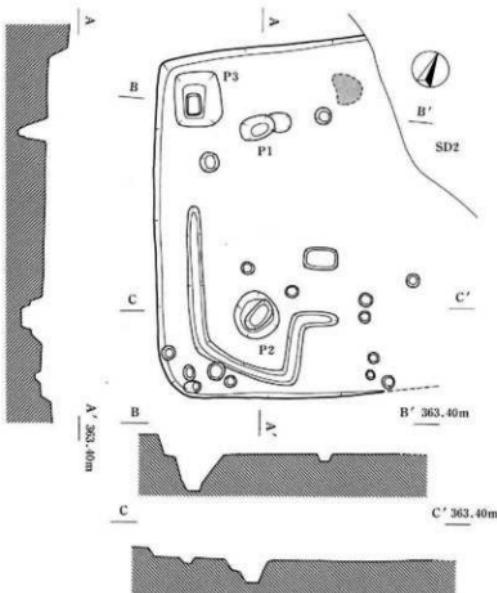


図28 第1号住居址実測図（1:80）

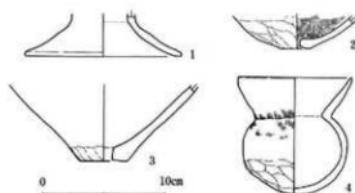


図29 第1号住居址出土土器実測図（1:4）

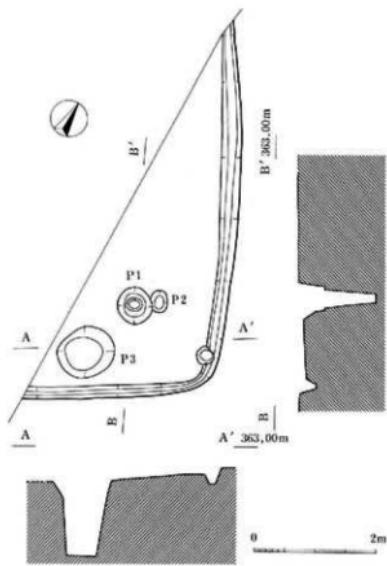


図30 第2号住居址実測図（1：80）

第7号住居址（図32）

調査区南側にて検出された住居址で、第1号古墳周溝ならびに第9号住居址に切られ詳細は不明である。

平面プランは一辺2.00mほどの小型の隅丸方形住居址と推定される。確認面からの掘り込みは平均15cm前後と浅く、床面は全体に軟弱で不明瞭なものである。柱穴はP₁とP₂が検出されている。P₁は掘り込み規模より主柱穴と推定されるが、P₂は浅く性格不明である。炉等その他の施設は検出されていない。出土土器はいずれも、住居址覆土内より出土したものである。

出土土器の様相より古墳時代前期の所産と考えられる。

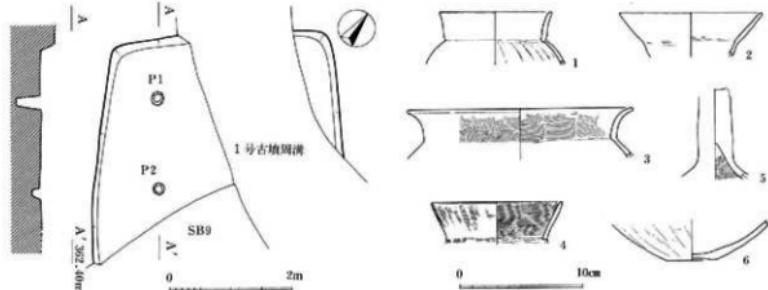


図32 第7号住居址実測図（1：80）ならびに同住居址出土土器実測図（1：4）

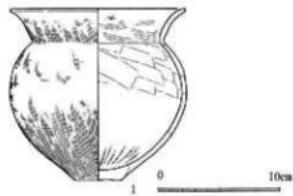


図31 第2号住居址出土土器実測図（1：4）

平面プランは隅丸方形住居址と予想されるが、規模は不明である。確認面からの掘り込みは平均10cm前後と浅く、床面は全体に軟弱で不明瞭なものである。

主柱穴はP₁が検出されたのみであるが、掘り込みは深さ60cmと深くしっかりしたものである。南壁際で検出されたP₂は貯藏穴と推定され、50×40cmの円形を呈し、深さ約62cmを測る。

壁際には深さ10cm前後の壁周溝が認められ、検出された範囲では全周している。

図31の甕は排水溝掘削時に出土したものであるが出土位置から本住居址に伴うものである可能性が高い。

古墳時代前期の所産と考えられる。

第1号古墳 (図33~36)

調査区南半にて検出されたもので、東側1/4ほどが調査区外となる。現表土直下がすぐ遺構確認面となり、墳丘はほぼ完全に削平されており、周溝のみを検出した。

本調査地周辺は、従来古墳群の存在は確認されていなかったが、周辺の踏査の結果、古墳の可能性が考えられる地ぶくれ状の高まりが数カ所確認されており、出土土器の様相からも古式の群集墳内の1基となる可能性が非常に高い。

形態は円墳で、周溝幅を含めた全径は南北で約16,40m、墳丘径は南北で約12,30mを測る。確認面からの掘り

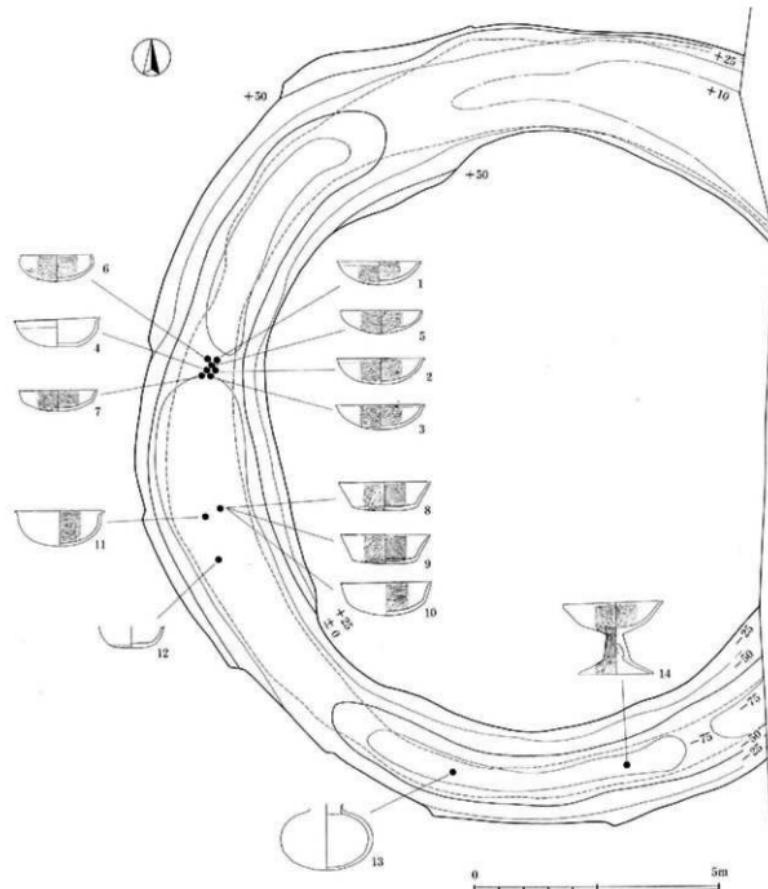


図33 第1号古墳周溝実測図 (1 : 100)

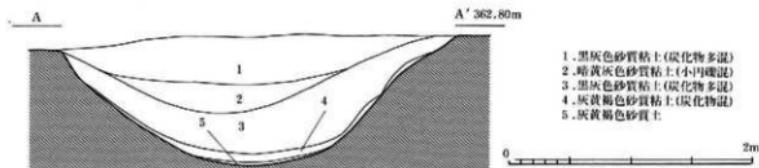


図34 第1号古墳周溝土層堆積状況実測図（1：40）

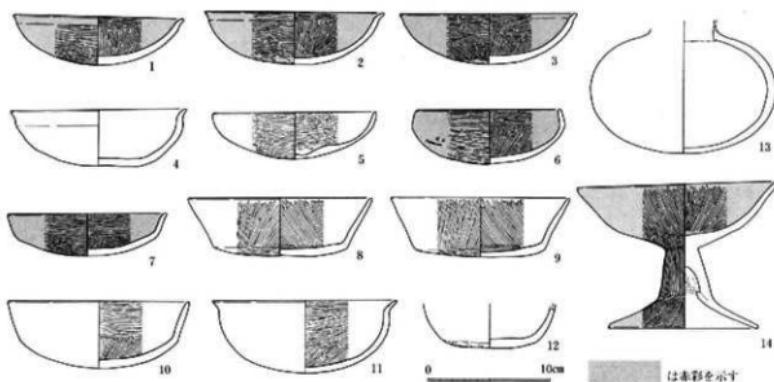


図35 第1号古墳周溝出土土器実測図（1：4）

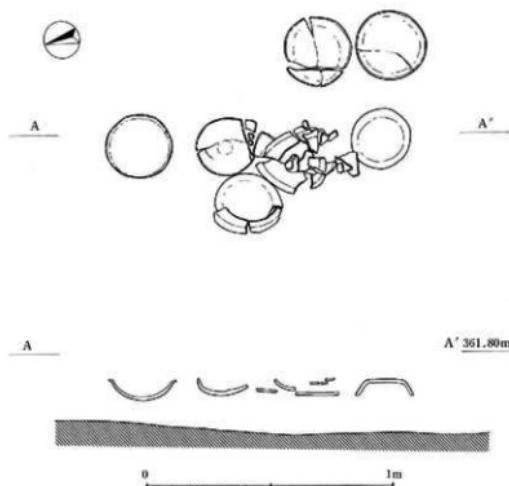


図36 第1土器集中区実測図（1：20）

込みは埴丘端部より計測すると、西側がもっとも深く83cm、南側が80cm、北側がもっとも浅く43cmである。周溝の断面形態は逆台形状を呈するが、埴丘部側が緩やかで、外周側がやや急傾斜である。

周溝覆土は基本的に5層よりなりレンズ状の自然堆積を示している。第1層は平安期の包含層、第3層下層から4層が周溝掘削直後の堆積と考えられ、古墳時代中期の土器が出土している。

土器の出土状況は第3層下層から4層にかけての周溝底部付近に、ある種の周溝内祭祀を反映すると見られる土器群が検出されている。

第1土器集中区は西側に位置し、

図351～7の7個の土器器環が、ほぼ同一レベルで並べられた状態で出土している。このうち1・4・5は正位で、2・3・6・7は伏せられた状況で出土している。1～3・5～7はほぼ原形を保っているが、中央に位置する4は故意に破碎されたかのような状況であった。

第2土器集中区は第1土器集中区の南側約3mほどのところに位置し、8～12の土器器環が出土している。このうち8～10は入れ子状に組み合わせて伏せた状況で、また11はその西側にやはり伏せた状況で出土している。二つの集中区は共にそれに伴う掘り込みなどの特別な施設は確認されていない。

周溝南側では高環14と壺13が出土されている。高環14は、周溝底に横倒しの状態で出土したもので、環部には赤色顔料（ベンガラ）が盛られており、周辺の周溝底にもベンガラが飛び散ったような状況で検出されている。

13はほぼ正位の状態で出土したが、出土レベルが他の土器群に比してかなり高く、あるいは墳丘部より転落したものである可能性も考えられる。

出土土器の様相からは、第1土器集中区・高環14と第2土器集中区出土土器との間には若干の時間差が存在し、第2土器集中区出土土器のほうが時間的に後出する可能性が高い。墳丘が完全に削平されており主体部が存在しないので不明な部分が多いが、この土器群の示す時間差は、複数埋葬に伴うそれぞれの葬送祭祀の存在を示している可能性も考えられる。時期的にはともに古墳時代中期後半に位置づけられる。

4号墓（SK4）（図37～39）

調査区北側にて検出されたもので、北隅は他遺構との切り合いにより一部を破壊される。

墓壙掘り方は1.85×0.58mほどの隅丸長方形を呈し、確認面からの深さは平均10cm前後を測る。

墓壙中央付近からガラス小玉が集中して出土し、また、南側には鉄刀が1本、墓壙長軸に平行した形で、切先を東西に向けて出土しており、埋葬頭位は北東方向であったと推定される。墓壙底は全体に平坦で、木棺等の痕跡は確認されていない。

墓壙中央部からは1～14までのガラス製の玉類が出土しているが、8～14は覆土の水洗によって検出したものである。1～13はガラス小玉で、1・2・13はモスグリーン、3・4・8～10はコバルトブルー、5～7・11・12はスカイブルーを呈する。14はガラス製の管玉でイエローを呈する。

直刀は切先部分を欠損するが、残存部長約39cm・茎部長7.9cmを測る。茎には目釘穴が一個確認できる。また、桟

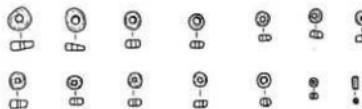


図38 4号墓出土遺物実測図① (1:1)

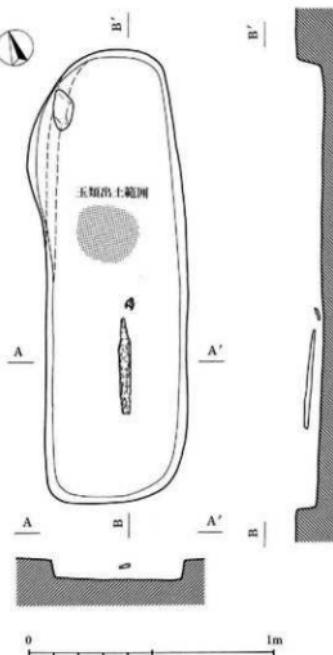


図37 4号墓実測図 (1:20)



図39 4号墓址出土遺物実測図② (1:3)

目の木目痕が若干残存している。柄頭も残存するが、遺存状況が悪く詳細は不明である。

4 平安時代の遺構と遺物

第10号住居址 (図40, 41)

調査区南端にて検出された住居址で、9号住居址を切るが南と東側は調査区外となり1/4程を検出したに過ぎない。平面プランは一辺2.40mほどの隅丸方形と予想され、確認面からの掘り込みは平均10cm前後と浅い。床面は全体に不明瞭なものであった。柱穴は5本検出されているが不規則な配置で本住居に伴うものか不明である。カマドは北壁中央付近に位置するが袖部は破壊されており、火床面を検出したに過ぎない。

出土土器はいずれも覆土内からの出土である。5の突帶付四耳壺は頭部に2の須恵器環を蓋状にはめ込み逆位に埋置された状況で覆土上層より出土している。

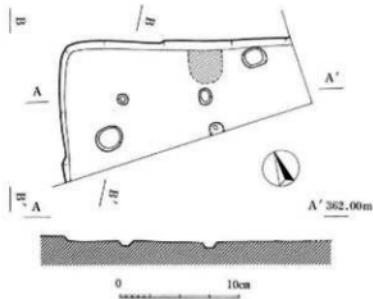


図40 第10号住居址実測図 (1:80)

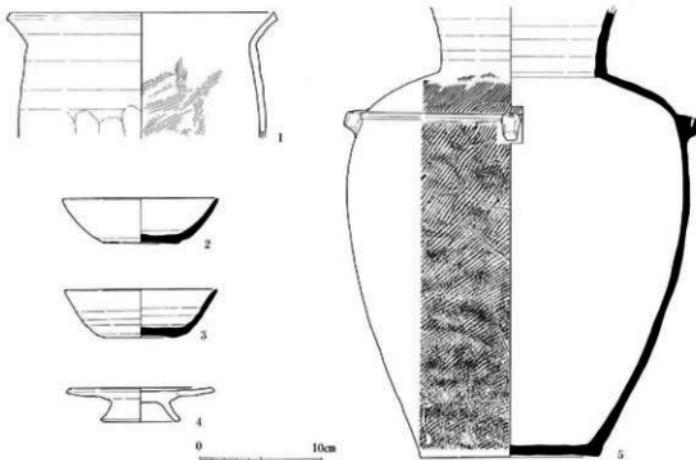


図41 第10号住居址出土土器実測図 (1:4)

明確な掘り込みは確認できなかったものの、本住居址覆土に蔵骨器として埋められたものである可能性も考えられる。

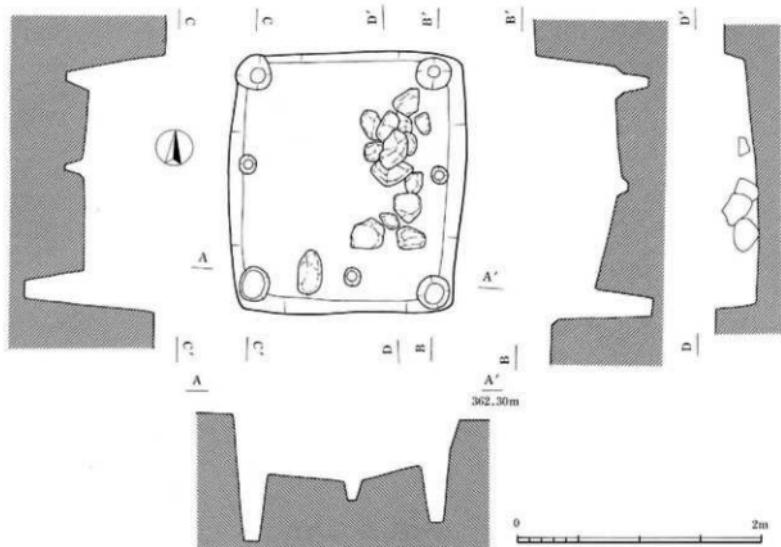


図42 第12号土壤実測図（1：40）

第12号土壤（図42）

調査区南側にて検出されたもので、第5号住居址を切って構築される。平面プランは $2.14 \times 1.96\text{m}$ の隅丸方形を呈し、確認面からの掘り込みは平均60cm前後と深い。土壤東半に30~40cm大の角礫が部分的に組み合わされた状況で検出されているが、性格不明である。 $P_1 \sim P_7$ の柱穴が検出されている。 $P_1 \sim P_4$ は土壤四隅に整然と配置されており、掘り込み規模も深くしっかりしたものである。 $P_5 \sim P_7$ はそれぞれ壁際中央に配置されるが、浅いものである。底面はさほど締まった状況ではない。土器等の出土遺物は全くなく、時期・性格等詳細不明である。

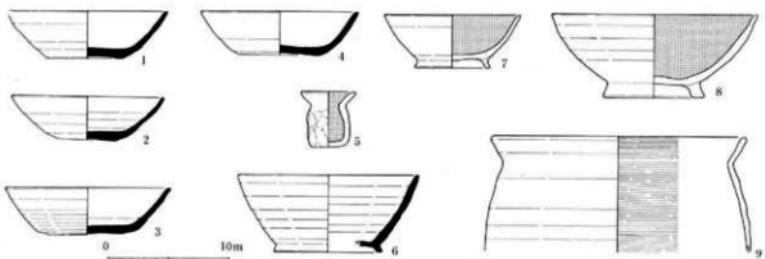


図43 第2号溝址出土土器実測図（1：4）

第2号溝址（図43）

調査区北側で検出されたもので、1号溝址・1号住居址を切る。ほぼ地形の傾斜に沿って、北西から南東へ直線的に伸びる。約23mほどにわたって検出したが、確認面での幅平均1,60m前後・溝底幅平均0,70m前後を測り、断面は緩やかな逆台形状を呈する。一時期自然流路として機能していた1号溝址が完全に埋没した後、新たに掘削しなおされた溝址である。出土遺物はほとんどが覆土上層からの出土であり、明確な掘削時期は不明である。

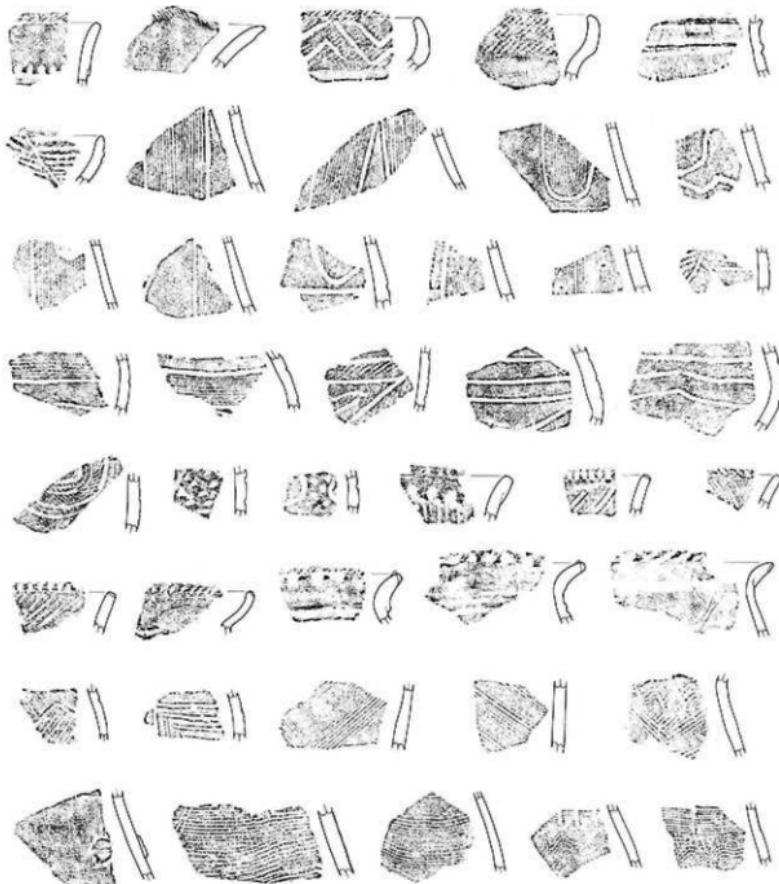


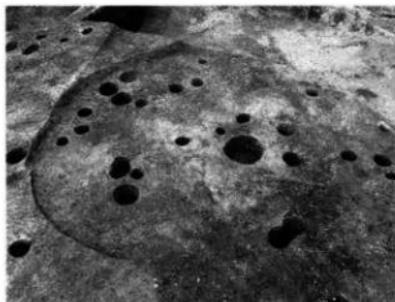
図44 遺構外出土器拓影（1：3）

番号	器種	法量(cm)		遺存度	成形・調整・文様		備考	
		口径	底径		外 面	内 面		
第6号住居址								
1	壺	18.4		1/10	L R繩文-範山形文.ハケーナデ	ヨコナデ	覆 土	
2	壺			1/3	L R繩文-範直線文・範山形文.ハケ-磨き○△ナデ	磨耗・詳細不明	覆 土	
3	甕	17.5		1/4	口唇: L R繩文.脣部: 櫛波状文	ハケ-磨き	覆 土	
4	甕	12.9		1/8	口唇: L R繩文.脣部: 櫛波状文	ナデ-磨き	覆 土	
5	甕	22.4		1/10	口縁: ナデ-範山形文.頭部: 櫛等間隔止め範状文	ハケ-磨き	覆 土	
第8号住居址								
1	甕	21.6		1/8	口唇: RL繩文.口縁~脣部: 篦波状文.ハケ	ハケ-磨き	覆 土	
2	台付甕	6.4		2/3	磨耗詳細不明	磨耗詳細不明	覆 土	
3	脚付鉢	6.0		完	ナデ、2ヶ一対の穿孔	ナデ	覆 土	
第3号住居址								
1	壺	28.3		1/3	口縁: 縦ハケ.頭部: 櫛直線文5帯	口縁: 横磨き・赤彩.脣: ハケ	床	
2	壺			1/4	頭部: 櫛T字文.脣部: 赤彩	ハケーナデ	床	
3	甕	4.4		2/3	櫛波状文-縦磨き.底部: 篦ケズリ	横磨き	床	
第14号土壙								
1	壺	6.8		完	口縁・脣部: 篦磨き・赤彩.頭部: 磨きT文字	口縁: 磨き.脣部: ハケ		
2	壺	7.0		完	脣部: 篦磨き・赤彩.底部: 篦ケズリ	ハケーナデ		
3	壺	28.8		3/4	口唇: 山形突起.口縁: 磨き・赤彩.頭部: 櫛直線文	横磨き・赤彩		
4	壺	10.0		2/3	脣部: 篦磨き.底部: ケズリ-磨き	ハケーナデ		
5	壺	11.5		完	篠磨き	ハケ		
6	壺	11.4		3/4	口縁・脣部: ハケ-磨き.頭部: 櫛直線文3.底部: ケズリ	口縁: 磨き・赤彩.脣部: ハケ		
第1号住居址								
1	高坏	13.0		1/3	範磨き? (磨耗詳細不明)	横ナデ	覆 土	
2	甕	2.4		2/3	範ケズリ.焼成前穿孔1	ハケ	覆 土	
3	甕	4.0		1/4	範ケズリ-範磨き.焼成前穿孔1	ナデ	覆 土	
第2号住居址								
1	甕	14.4	3.8	14.2	2/3 口縁: 斜ハケ-横ナデ.脣部: ハケーナデ	口縁: ハケーナデ.脣部: 篦ケズリ		
第7号住居址								
1	壺	9.2		1/10	口縁: 横ナデ.脣部: ハケーナデ	口縁: ハケーナデ.脣部: 篦ナデ	覆 土	
2	丸底鉢	11.8		1/4	範ケズリ-磨き	ハケ-横ナデ	覆 土	
3	甕	18.5		1/4	ハケ	ハケーナデ	覆 土	
4	壺	10.7		1/4	ハケーナデ	ハケ-ナデ	覆 土	
5	高坏			完	縦範磨き	坏部: 磨き.脣部: ハケ	覆 土	
6	甕		4.0	2/3	範ケズリ-ナデ	範ケズリ-ナデ	覆 土	
第1号古墳								
1	坏	13.9	4.0	完	口縁: 強横ナデ.体部: 篦ケズリ-範磨き・赤彩	範磨き・赤彩	第1集中	
2	坏	14.7	4.3	完	口縁: 横ナデ-著き.体部: 篦ケズリ-範磨き・赤彩	範磨き・赤彩	第1集中	
3	坏	14.5	4.2	完	範ケズリ-範磨き・赤彩	範磨き・赤彩	第1集中	
4	坏	14.3	4.6	完	範ケズリ-範磨き	範磨き? (磨耗詳細不明)	第1集中	
5	坏	13.3	3.9	完	範ケズリ-範磨き	横範磨き	第1集中	
6	坏	11.8	4.5	完	ハケ-横範磨き・赤彩	放射状範磨き・赤彩	第1集中	
7	坏	13.0	3.5	完	ケズリ○△ハケ-横範磨き・赤彩	横範磨き・赤彩	第1集中	
8	坏	15.0	10.8	4.8	完	口縁: 斜範磨き.底部: 橫範磨き	斜範磨き	第2集中

出土土器観察表1

番号	器種	法量(cm)		遺存度	成形・調整・文様		備考
		口径	底径		外 面	内 面	
第1号古墳							
9	壺	24.7	10.5	4.9	3/4	口縁：斜観磨き、底部：観ケズリ一観磨き	斜観磨き
10	壺	14.8		5.5	3/4	口縁：横ナデ一横観磨き、底部：観ケズリ一観磨き	横観磨き
11	壺	15.0		6.0	完	口縁：横ナデ一横観磨き、底部：観ケズリ一観磨き	観磨き
12	壺				2/3	体部：観磨き、底部：観ケズリ	磨耗詳細不明
13	壺				完	体部：綴観磨き、底部：観ケズリ一観磨き	口縁：観磨き、脇部：ナデ
14	高壺	16.7	12.5	11.8	完	壺部：斜観磨き、脚部：綴観磨き、赤彩	外部：斜磨き・赤彩、脇部：ナデ
第10号住居址							
1	甕	21.8			1/8	ロクロナデ一観ケズリ	口縁：ロクロナデ、脇部：ハケ 覆土
2	壺	12.8	6.2	3.8	完	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ 覆土
3	壺	12.6	6.0	4.0	1/2	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ 覆土
4	高台壺	12.2	6.6	2.8	1/2	ロクロナデーナデ	ナデ 覆土
5	四耳壺	14.9			完	口縁：ロクロナデ、脇部：タタキ、底部：ケズリ	口縁：ロクロナデ、脇部：ナデ 覆土
第2号溝址							
1	壺	13.4	6.3	4.0	3/4	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ 覆土
2	壺	12.7	4.8	3.6	2/3	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ 覆土
3	壺	13.8	6.2	3.9	3/4	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ 覆土
4	壺	13.1	6.7	3.6	2/3	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ 覆土
5	壺	4.6	3.2	4.6	完	指頭押捺一ナデ	ナデ、黒色処理 覆土
6	高台壺	14.9	9.0	6.4	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ 覆土
7	高台壺	12.3	6.3	4.4	1/2	ロクロナデ、底部：回転糸切り	観磨き・黒色処理 覆土
8	高台壺	17.2	8.5	6.9	1/3	ロクロナデ	観磨き・黒色処理 覆土
9	甕	21.2			1/4	ロクロナデ	カキメ 覆土

出土土器観察表2



第4号住居址



第5号住居址



第8号住居址



第3号住居址



砾床墓群



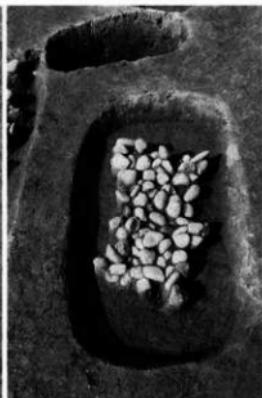
第1号砾床墓



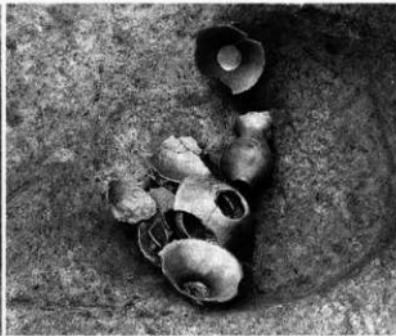
第2号砾床墓



第3号砾床墓



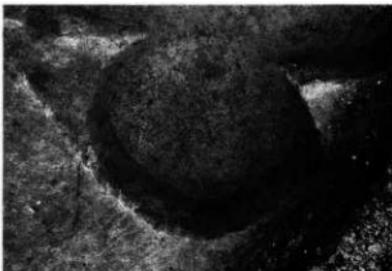
第4号砾床墓



第14号土壤土器出土状况



第14号土壙土器出土状況



第14号土壙掘り上がり状況



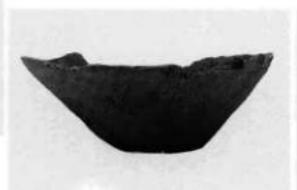
14号土壙 1



14号土壙 2



14号土壙 3



14号土壙 5



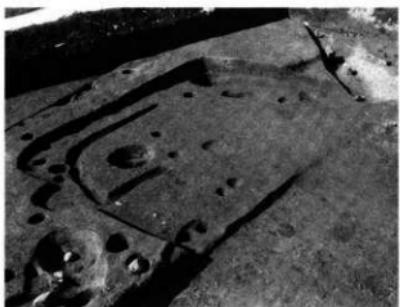
14号土壙 4



14号土壙 6



第1号・2号溝址土層堆積状況



第1号住居址



第2号住居址



第1号古墳（南より）



第1号古墳（北より）



第1号古墳周溝土層堆積状況



第1号古墳第1土器集中



第1号古墳第2土器集中

第1号古墳高环14出土状况



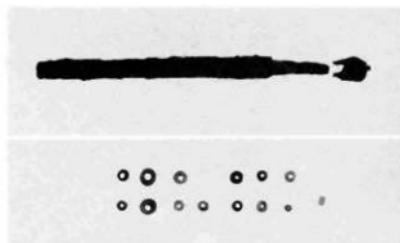
第1号古墳周溝出土土器



第4号墓址



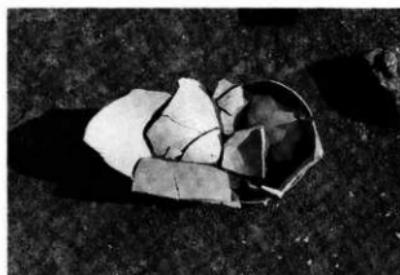
第4号墓址直刀出土状况



第4号墓址出土直刀·玉類



第10号住居址



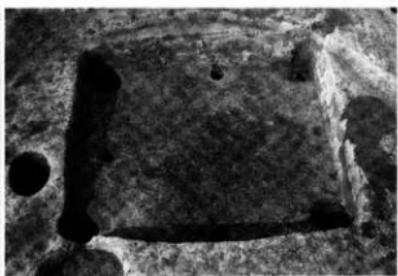
第10号住居址四耳壺出土状况



第10号住居址出土四耳壺



第12号土壤



報告書抄録

ふりがな	あさかわせんじょうらいせきぐん とくまほんどうはらいせき						
書名	浅川扇状地遺跡群 徳間本堂原遺跡						
副書名	土木事業代替地先行取得事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財						
シリーズ番号	第69集						
編著者名	千野 浩						
編集機関	長野市教育委員会(埋蔵文化財センター)						
所在地	〒381-22 長野市小島田町1414 長野市立博物館内 Tel 0262-84-0004						
発行年月日	1995年3月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
徳間本堂原 遺跡	長野市大字徳間 字本堂原1067-2			36度 40分 40秒	138度 14分 11秒	1995年1月 30日～3月 7日	1,000m ² 宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
徳間本堂原 遺跡	集落 古墳 弥生時代 古墳時代 平安時代	縄文時代 古墳 古墳時代 平安時代	住居址・礎床墓・土塼 古墳・土墳墓・住居址 住居址・溝址	土器・石器 弥生土器 土師器・直刀・ガラス玉 四耳壺・土師器・須恵器			

長野市の埋蔵文化財第69集

浅川扇状地遺跡群徳間本堂原遺跡

平成7年3月25日 印刷

平成7年3月30日 発行

編集 長野市教育委員会
 発行 長野市埋蔵文化財センター
 印刷 奥山印刷工業株式会社